

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

不空訳『仏母大孔雀明王経』の音訳漢字に関する音韻学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hashimoto, Takako メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1363

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



氏 名 橋本 貴子

本 籍 神奈川県

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 甲第27号

学位授与年月日 2012年3月23日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項に該当

【昭和28年4月1日文部省令9号】

学位論文題目 不空訳『仏母大孔雀明王経』の
音訳漢字に関する音韻学的研究

審査委員	主査 神戸市外国語大学教授	太田 斎
	委員 神戸市外国語大学教授	武内 紹人
	委員 神戸市外国語大学准教授	竹越 孝
	委員 早稲田大学文学学術院教授	古屋 昭弘
	委員 京都大学大学院文学研究科教授	吉田 豊

1. 論文内容の要旨 2

2. 論文審査結果の要旨 5

不空訳『仏母大孔雀明王経』の音訳漢字に関する音韻学的研究

要旨

本論文は研究編と資料編よりなる。

【研究編】

第1章「序論」

第1章では、本研究の目的、先行研究、研究方法について述べる。

第1節では、本研究の目的が不空訳の音訳漢字に反映される(1)唐代音と(2)Sanskrit（以下、Skt）音の特徴を検証する点にあることを提示する。

第2節では、不空訳の音訳漢字に関する主な先行研究である、H. Maspero 氏、羅常培氏、水谷真成氏、劉広和氏、Coblin 氏による論考の概要を紹介する。そして、それらの研究が抱える問題として、データの扱いが必ずしも周到ではない点、時代的制約により参照した同時代資料の種類が少ない点、Skt の発音に関する検討が一部に止まっている点を指摘する。

第3節では、従来の研究の問題点を克服するために、対象を十分なデータ量を有する『仏母大孔雀明王経』（以下、『孔雀経』）の音訳漢字に限定して精査する、という方法を採用することについて述べる。

第2章「資料について」

第2章では、不空訳『孔雀経』、使用するテキスト、音訳漢字の抽出方法についての説明を行う。

第1節では、訳者である不空の経歴および不空の訳場組織の概要について述べる。そして、不空の Skt 音がインドの特定の地域のものであると予め仮定するのは難しいこと、音訳は訳主である不空自身が行ったのではなく、担当者が実際の作業を行ったと考えられることを指摘する。

第2節では、本研究で使用する東京大学国語研究室所蔵本（以下、東大本）および参照する他本の性質について紹介する。東大本は完本であり、その音訳漢字は、相対的に見て後人の改訂がほとんど加えられておらず、訳出当時の状態に比較的近いと考えられる。なぜなら、下巻しか残っていないとはいえ、最古、最善のテキストである『三十帖策子』第15帖所収本との間で異同が少ないからである。また、東大本の陀羅尼部分には音訳漢字の傍らに対応する Skt が悉曇文字で併記されている。この悉曇文字で表記された Skt には、字形の類似に起因する誤写が多く含まれているので、それら誤写の処理方法について説明を加える。

第3節では、音訳漢字と Skt との対応範囲を確定させる際の基本的な考え方について述べる。

第4節では、音訳漢字とその対応範囲を分類する方法について述べる。分類の結果は資料編「音訳漢

字・Skt 対応一覧」にまとめてある。

第3章「音韻学的研究」

第3章では、『孔雀経』の音訳漢字と Skt との対応関係から、音訳漢字に反映される唐代音と Skt 音の特徴について検討を加える。その際、不空の活動時期に近い時期に成立した、他の漢語音韻史資料（慧琳『一切経音義』の反切、日本漢音、チベット対音資料、ソグド文字資料、漢訳マニ教文献の音訳漢字）や Skt 音に関する研究・資料に言及することがある。この章の冒頭では、それらの研究・資料について紹介する。

第1節では、漢語の声母と Skt の子音について検討する。

漢語側の特徴としては、軽唇音化、全濁音の有気音化、次濁鼻音の非鼻音化が認められる。更に以下の点を指摘することができる。

- 同時期の他の資料は全濁音の無声化の反映が見られるのに対し、『孔雀経』の音訳漢字は全濁音の無声化を反映しない。8世紀の長安音では、全濁音の完全な無声化はまだ起きておらず、入り渡りの部分が無声化し、出渡りの気音部分に有声性が保存されていた状態にあったと考えられる。
- Maspero 氏が指摘した、鼻音韻尾を有する音節において次濁鼻音の非鼻音化が妨げられる傾向が『孔雀経』の音訳漢字にはあまり明瞭に現れない。しかし、これは非鼻音化と鼻音韻尾の有無とが無関係であったことを意味するものではなく、音訳漢字の資料的性質によるものと思われる。外国語で漢語を表記した資料の反映に基づくならば、鼻音韻尾を有する音節で声母の鼻音性が保たれる傾向は、やはり概ね認めてよい。
- Skt の有声無気音と鼻音に対する音訳は、従来インド側の方言的特徴の反映と考えられたことがある。しかし、肥爪周二氏による検証および Skt 音を外国語で写した資料の反映に基づくならば、問題の音訳はインド側ではなく漢語側の方言的特徴を反映したものと考えるのが妥当である。
- 研究者によっては中古音における舌上音の音価をそり舌音と推定する。しかし、諸資料における反映を見ると、漢訳仏典での音訳状況を根拠に舌上音をそり舌音と考えるのは難しい。唐代中期以降の長安音ないし西北方言では舌上音が口蓋化して[t-]等になっていたと考えられる。不空訳の音訳漢字が依拠した漢語音でも舌上音が[t-]等のようにになっていた可能性が高い。
- k kh g gh を牙音3等 B・C 類の字で音訳する傾向について、従来 Skt 側の問題と考えられることがあったが、漢語側の牙音3等 B・C 類の性質も理由の一つであった可能性がある。

Skt 側については、c ch j jh の歯音的な調音傾向、子音連続 jñ、kṣ、ts に見られる方言的特徴の反映が見られる。

第2節では、漢語の韻母と Skt の母音等について検討する。

Skt の母音は、漢語と比べて種類が少ないので、音訳漢字から漢語の韻母について得られる情報はあ

まり多くないが、以下の点を指摘することができる。

- 介音について。i、īを含む音節の音訳には3等A類の字が用いられる。重紐の対立は臻撰に見られる程度である。
- 鼻音韻尾-m、-n、-ŋの区別、入声韻尾-p、-t、-kの区別は保たれている。但し、宕・梗摂舒声が声母が次濁鼻音の場合にSktの開音節に対応し、鼻音韻尾-ŋの存在が確認できない。開口度の大きい主母音を持つ宕・梗摂では、韻尾が相対的に弱くなり、音声的実現においては恐らく鼻音韻尾-ŋは発音されず、その代償作用として主母音が鼻母音化していたのであろう。この鼻母音化によって次濁鼻音声母の鼻音性が保持される傾向が強くと見られたために、『孔雀経』では宕・梗摂の次濁鼻音の字をSktの開音節の音訳に用いたものと思われる。
- -t入声の韻尾のみでSktのrやdを表すことがある。他の同時代資料においても、漢語の-t入声の韻尾で外国語のr、l、dを表したり、逆に外国語のrで漢語の-t入声の韻尾を表記することから、特に-t入声の韻尾は-k入声や-p入声よりも閉鎖が緩かったと考えられる。

Skt側においては、流音母音r̥r̥l̥l̥が何らかの中舌的な音で読まれていた可能性、mが語末において必ずしも次の語句の語頭の子音に同化せず、しばしば[n]や[m]のように発音されていた可能性について指摘する。

第4章「結論」

第4章では、第3章において検討した内容を踏まえ、『孔雀経』の音訳漢字が反映する唐代音とSkt音の双方について総合的に論じる。

第1節では、音訳漢字に反映される唐代音には、特に声母と韻尾の子音に関して、西北方言の音声的特徴が見られる一方、中古音と同様の保守的特徴も見られることについて述べる。そして、それらの特徴に対する総合的な解釈として、『孔雀経』の音訳漢字が反映する8世紀の長安音では、声母および韻尾の子音の体系は中古音の枠組みを保持していたが、具体的な音価においては西北方言という基層の影響によって、中古音とは異なる音声的特徴が現れていたとの考えを示す。

第2節では、音訳漢字に反映されるSkt音の方言的特徴について、不空の出身地や経歴に関する情報には不確定な要素が多いこと、北インドに限定される特徴とは言えないこと、不空の師である金剛智からの継承性についても調査する必要があることから、現段階ではいずれの地域の発音であったのかについて、明確な答えを出すことはできないとする。

第3節では、漢語のある音声的特徴が漢語の音韻的区別に関わる場合はその反映が見られるが、漢語の音韻体系の範囲内に収まるような特徴であれば反映しないという音訳漢字の資料的性質について、本研究での具体例に即して述べる。

最後に第4節では、本研究のまとめとして、本研究で行った従来の説の検証および幾つかの新たな指摘が、研究対象を『孔雀経』の音訳漢字に絞ることによって分析の精度を上げることができ、更に同時代資料を複数利用できたことによるとの考えを示す。

【資料編】

資料編は以下の3部よりなる。

○ 東京大学国語学研究室蔵『仏母大孔雀明王経』で使用されている悉曇文字

東大本の陀羅尼部分において音訳漢字に併記された悉曇文字を母音、子音毎に整理し、ローマ字転写を付けたもの。

○ 東京大学国語学研究室蔵『仏母大孔雀明王経』陀羅尼テキスト及び校異

東大本の陀羅尼部分を翻刻し、他本との異同の状況を明らかにしたもの。

○ 音訳漢字・Skt 対応一覧

各音訳漢字が対応する Skt 音、出現回数、各出現箇所における Skt との対応等について、整理、分類したもの。

以上